

親鸞さまの

【本文】

正しょうぼう 法の時機とおもへども

ていげぼんぶ 底下の凡夫となれる身は

しょうじょうしんじつつ 清 浄真 実のころなし

ほつぼだいしん 発菩提心いかがせん

【意識】

お釈迦様のご在世中であるという恵まれた時代、環境であつても、

そもそも仏に成る道を歩もうともしない人は、

清浄の心（お釈迦様、阿弥陀様に帰依する心）が全くもつて不足しているために、仏に成ることは出来ません。

元々、このような人は清浄心を自力で発起（ほつき）することがないのです。

【私の味わい】

「一念発起」という言葉は、元々「仏様に帰依し、成仏道を歩もうと決意すること」という意味です。何事も決意するということは、並々ならぬ努力が必要になります。継続することも、結果を出すことも。しかし、親鸞聖人が上記のところで仰っているのは、そもそも決意しない人についてです。

技術習得のために努力しない人には結果が伴わないように、仏教に帰依するという「一念発起」をしない人は成仏できません。人は煩惱の濁り心、つまり自分で自分に帰依し、自分中心に欲をかき、腹を立てています。この為、清浄心を発起する、仏様に帰依しようということなど夢にも思わない、だからこそ本来成仏は夢のまた夢である、と親鸞聖人は教えて下さいます。

しかし、この人の様を憐れとご覧になられ、放っておかないと立ち上がられたのが阿弥陀如来様であるとお伝え下さいます。人間の方で発起しないならば、如来の方から手をまわして発起させよう。自分にではなく、如来の方を基準にした人生を歩ませようとお慈悲を垂れたもうのが如来様であると聖人は喜ばれました。

今、私たちがお念仏できるのも、お慈悲をお慈悲と思えるのも、全て阿弥陀様のお蔭です。ご縁なければ、阿弥陀様の姿を拝見しても、お念仏しても何とも思わないまま、お浄土にも往かず、成仏も無い行く末になっていたでしょう。ただ、ただ、ひとえに  
お慈悲のお陰と喜んで、進んで聴聞とお念仏を味わいたいものです。

（悠水）